



普請出来付尔恐奉御披露上叶
 文明開化大都の繁栄大千
 界は名所も居あつし見ざる
 寫真の妙術ありと競ふ富士
 筑波と右と左は東京の昔也
 武藏野の月小やうり花の男
 や三きり乃糸の色深き歌妓ハ
 いづもさらん花の盛は容貌頭
 に積る白雪の晩年乃は
 壯年をかこぞ千里萬里を隔てる
 美麗寫画を朝暮小詠えて憂さ
 なくともハ抑寫真の徳とや然と
 ハ拙と巧とこそその面影も異るハ
 勝るは批判ハ一度寫してはん
 愈は意は叶ふ先々かあふぞや
 世御風聴の程をひそえは希ふ
 錦榮ふ代

慶岸主人誌

當七月十七日より

三十日の留糸相さりと申す

但し四ツ時より八ツ迄の間に
 参り日限るは引れは持糸の
 は客旅ハ糸相さり上りや

寫真所
 東京神田柳町いさゝか河岸前
 澤崎錦榮

出窓の傍の前日に沙汰と教下ハハ何カハ由出張可仕也
 所宛心のほうハ在料にては傍習仕ハ留糸はさる取ハ天地の草木ハ巴の
 刺を要とせむ普く弘通ハ共利益を得ては今日國士の恩を謝せんとす先
 則ち兼が英おハは是の外に上
 錦榮再拜